

法然門流における至誠心積の展開

廣川堯敏

法然門流における至誠心積は大別し二てつの立場に分類できる。一つは衆生の側に立つ至誠心積で、鎮西派の聖光・良忠、九品寺流の長西、諸行本願義系の住心・真空・悟阿・凝然等の諸師が含まれる。いま一つは仏の側に立つ至誠心積で、一念義の幸西、長樂寺流の隆寛、西山派の証空、一向宗の親鸞等の諸師が含まれる。

まず、衆生の側に立つ至誠心積の具体例をあげると、

- ① 内心と外相と相応して偽らず飾らざるの心。(弁長『浄土宗要集』)
- ② 能成の心なり。発得至誠の時業事成弁するが故なり。(長西『観經疏光明抄』)
- ③ 強盛の心なり。(明遍)
- ④ 浅深なし、唯内外相応する名なり。(乘願)
- ⑤ 防非止悪の戒を体とするなり。(修阿)
- ⑥ 止悪も真実、修善も真実なるを至誠心と名くるなり。(敬蓮社)
- ⑦ 癡直なりと知るを最要となすべきなり。(持仏房)

法然門流における至誠心積の展開(廣川)

⑧ 随分の至誠なり。……最下愚鈍の具縛の衆生も亦自分に堪ゆる所の誠心有り。(良遍『善導大意』)

などがある。これらに共通することは、諸行が本願であるか、非本願であるかの違いはあるものの、ともに諸行往生を認める立場に立脚している。

次に仏の側に立つ至誠心積の具体例をあげると、

- ① 領解の心なり。領解の心とは自力を捨てて他力に帰する心なり。(証空『他筆鈔』)
 - ② 他力に約して真実心を立てるなり。(隆寛『散善義問答』)
 - ③ 如来能く度するは是れ心なり。心とは智なり。能く物を度す真実は唯一念の心なり。……是を真実心と名け、……(『浄土法門源流章』幸西の項)
 - ④ 至誠心……如来願力廻向の心なり。(親鸞『愚禿鈔』)
- などがある。これらに共通することは、ともに阿弥陀仏の本願力を強調し、諸行往生を否定する立場に立脚している。
- このように法然門流の諸派は至誠心に対する解釈の相違を

基準として二つのグループに大別することができよう。

証空の至誠心積は衆生が機の上におこす真実心ではなく、
 仏の真実心である、とする。そこで、証空は至誠心について
 二つの問いを持つ。第一は濁悪の凡夫にはたして真実の心を持
 ちうるか否かの問いである。その根拠は善導・至誠心積の
 次のような釈文にもとづいていることは明白である。

「貧瞋邪偽奸詐百端、惡性難侵、事同三蛇蝎、雖起三業、名為雜
 毒之善、亦名虛假之行、不名真実業也」

このように凡夫には真実心をもちえないとする理解の上に
 立って、さらに証空は独創的な思想を展開する。すなわち、
 善導は不真実な虚仮心とはどのようなものであるかについて
 「不得外現賢善精進之相内懷虚假」と述べているが、この訓
 読については次のような種々の異説がある。

- ①外ニ賢善精進ノ相ヲ現シテ内ニ虚假ヲ懷コトヒサレ（建長六年
 書写三部経大意）
- ②外ニ賢善精進ノ相ヲ現スルコトヲエサレウチニ虚假ヲイタケレ
 ハナリ（正嘉二年書写三部経大意）
- ③外ニ賢善精進ノ相ヲ現シ内ニハ虚假ヲ懷クコトヲ得ズ（了音鈔
 にもとづく、西全⑥105b~106a）

右の三種の訓読のうち、①の訓読は長西・良忠の訓読で、
 長西は身口二業の起行（外）と意業即安心（内）とがとも
 に真実であることを勧説する、とし、良忠は、長西の意業即

安心説を否定し、起行として外相と内心との相應を勧説す
 る、と説く。②の訓読は親鸞で、自力の全否定である。③の
 訓読は証空で、この釈文は虚仮心の相をあらわすのではな
 く、他力の真実心の相（他力を領解すれば、もはや内外相應の障
 りに穢いされることがなくなる）をあらわす、とする。

第二は凡夫に真実がもちえないならば、真実とは一体何か
 という問いである。証空は真実の根源は阿弥陀仏の仏体、さ
 らにいえば、弥陀が因位に衆生のために衆生に代って施為趣
 求したところの、真実の誓願と真実の行とにある、とする。
 善導の釈文「凡所施為趣求」の読み方には次の異説がある。

- ①オホヨソ施為趣求シタマフトコロ亦真実ナルニ由テナリ。（良
 忠『三心私記』『決疑鈔』）
- ②凡、所施（所レ施）、趣求為、亦皆、真実ナリ。（建長六年書
 写『三部経大意』、括弧の中は正中本『選択集』書き込みの訓
 点）
- ③おほよそほどこしたまふところ趣求をなす、またみな真実な
 り。（『愚禿鈔』、『教行信証』信卷）
- ④オホヨソ施為趣求スルトコロ マタミナ真実ナリ。（『自筆鈔』、
 『他筆鈔』、『積学鈔』等の釈文にもとづく）

右の四種のうち、①の訓読は長西・良忠の訓読で、両者は
 ともに施為・趣求を仏の「上求菩提・下化衆生」とし、機根
 によって菩薩と凡夫とでは真実心に強弱の違いを認めるもの

の、真実心を凡夫にも求めている。②の訓読では「施」とは弥陀であり、「趣求」とは凡夫である。この訓読は隆寛の次のような釈文(『散善義問答』)によく一致している。

「凡_レ弥陀如来、名号相好乃至地上地下、一切莊嚴等偏_ニ為_{シテ}施_ス求_ム念_ス者、所_レ成就_ス也。為_{シテ}趣_ク求_ム人、所_レ莊嚴_ス也」

右の文では弥陀が「趣求」する人(凡夫)に対して他力の真実を施し与えるから、真実をもちえない凡夫にも真実心を見出し得ることを述べている。つまり、施為とは弥陀の下化衆生であり、趣求とは衆生の上求菩提である。③の訓読は親鸞の独創で、隆寛と同じく施為が弥陀の下化衆生で、趣求が衆生の上求菩提である。④の訓読は証空で、施為が能化(弥陀)の真実で、趣求が所化(凡夫)の真実である。(元久本、康樂寺旧蔵本『選択集』と一致する。)

以上、証空の至誠心積の特色として、自力の至誠心を否定すること、真実心の根源を弥陀因中の行に求めること、そして弥陀の真実が凡夫の真実へと展開する筋道を明らかにしたこと等をあげることができる。

一方良忠の至誠心積は三心積の中でもとくに独特である。周知のように良忠の著述は讓釈と再治とをくり返しているため、その至誠心積の成立過程を思想的に押えることはきわめて難しい。今かりに至誠心積に關説する良忠の著作活動を年代順に記すと、次のようになるのではなからうか。

法然門流における至誠心積の展開(廣川)

① 建長六年(一二五四) 仲秋上旬 四卷本決疑鈔(未伝)
② 同 十月上旬 一卷本三心私記
③ 建長年間か 散善義聞書(未伝)

④ 正嘉二年(一二五八) 初稿本伝通記(未伝)
⑤ 文永元年(一二六四) 散善義略鈔

(光明寺誌の説による)
⑥ 文永十二年(一二七五) 再治本伝通記(未伝)

⑦ 建治二年(一二七六)頃 五卷本決疑鈔

(『諸記類聚』)

⑧ 弘安五年(一二八二) 十二月中旬以降 三卷本浄土宗要肝

心集

⑨ 同 五卷本浄土宗要集

⑩ 弘安十年(一二八七) 極再治本伝通記

右の十種のうち、現存する②・⑤・⑦・⑧・⑨・⑩の諸資料にもとづいて良忠の至誠心積を検討してみたい。まず良忠は至誠心の字義積について、諸行本願義系の明遍・長西、修阿の説を批判し、良遍の説に讃意を表している。良忠のいう至誠心が「唯己が分を局りて不諂の心を極」むる至誠心であるため、そこに、①至誠心はどのような心所を体とするか、②至誠心の程度に高下・浅深はあるのか、③至誠心に退・不退はあるのか、等が問題となる。まず①について、良忠は五十六才、建長六年(一二五四)撰述の一卷本『三心私記』に行

捨単独説をうち出し、『決疑鈔』・『浄土宗要肝心集』がそれをうけつぎ、さらに『伝通記』・『東宗要』にいたって無貧説が追加され、行捨・無貧を至誠心の体とする説が成立したのである。②について、良忠は、至誠心は凡夫のおこす有漏眞実の心であるから、当然浅深・高下があるとす。『決疑鈔』では理証と文証をあげ、『東宗要』では理証を省き、文証と長西批判の問答とで論証している。③について、良忠の有退説は『東宗要』に詳細である。

最後に良忠の至誠心積の解釈上重要な点は善導の雖起三業の文に対する注目である。すなわち、善導の積文には、

「貧賤邪偽奸詐百端、悪性難侵、事同三蛇蝎、雖起三業、名為雜毒之善、亦名虚假之行、不名真実業。」

という。つまり、凡夫がおこす真実心と雖起三業の文との矛盾の解決である。そこで、まず異流の解釈を見た上で、良忠の解釈を問題にしたい。まず証空は聖道門自力の安心に執着し、留っている状態のことをさすとし、隆寛は他力真実を闡いて自力不真実を励む状態のことをさすとする。これに対して長西は安心が虚仮であるから、それにもとづく起行に煩惱が雜って、不真実の行になるのであって、要は衆生が猛利強盛の真実心（安心）をおこすことが大切である、とする。

このような諸説に対して、良忠の雖起三業説はその著述によっていくらかの変遷がみられる。すなわち、まず一巻本

『三心私記』に心行相違之義（聖光の表知三業説）を唱え、『決疑鈔』ではさらに三義（良忠の能等起三業説、聖光の起行三業説、明遍の刹那等起三業説）を追加し、『伝通記』ではこれら四義の順序を整え、かつ心行相違之義を削除し、最終的に『東宗要』ではさらに新しく良忠自説の虚仮三業起行説を追加増補し、「非云安心起真実心」と断じている。したがって、良忠は当初は雖起三業の文を虚仮の安心と善の三業との関係でとらえる心行相違之義を唱えたが、次第にそれを削除する方向に進み、ついには安心を否定し、三業の起行中心の解釈に至ったものといえよう。良忠が『東宗要』で『決疑鈔』の四義のうち、三義だけを取りあげたのは第四義に心行相違之義が残っていたからではなからうか。

『東宗要』における西山義批判（至誠心積を中心とする）は次の三つの論点に絞ることができよう。第一は悪性の凡夫が真実心をもち得るか否かの問題である。良忠が批難する「有云」とは直接的に隆寛であり、思想的には証空をもさしている。この問答を隆寛の『具三心義』および『往生論註』と対照すると、次のようになる。

有云眞実者、仏眞実也。心者行者心也。謂行者貧願邪偽之心也。争、発、眞実之心。耶。故知、帰、仏眞実之心。名、眞実心也。例、如、云、菩提心、云、云。

竹谷語云、是、与、彼、人、之、問、答、也。彼、人、勸、或、行、者、謂、難、発、眞実心、之、時、乃、証、論、註、云、下、有、漏、心、非、眞実、菩薩、無、漏、心、眞実、之、文、今、之、眞、実、為、眞、眞実、云、云。

このように「有云」とは直接的には明らかに隆寛をさしているが、また証空も、

「所、尋、眞実心、三、字、共、属、凡、夫、所、被、尋、三、字、共、帰、仏、一」

〔自筆鈔〕

と同様な思想を展開している。また善導の雖起三業の文について、隆寛・証空が凡夫のありのままの姿を深く掘りさげた解釈を展開しているのに対して、良忠はこの文は「起虚仮之由致」を明らかにしたのであって、「虚仮の体」を明らかにしたのではない、いかに凡夫といっても「皆、虚仮を起

法然門流における至誠心積の展開（廣川）

具三心義

問、尋、凡、夫、心、念、心、々、莫、不、顛、倒、莫、不、虚、偽、……此、心、念、中、欲、得、眞、実、……難、中、之、難、誰、可、得、之、哉。答、以、凡、夫、心、不、為、眞、実、以、弥、陀、願、為、眞、実、帰、眞、実、願、之、心、故、約、所、帰、之、願、名、眞、実、心、例、如、住、天、台、山、名、天、台、大、師、……問、弥、陀、本、願、眞、実、義、以、何、得、定、耶。

答、曇、鸞、法、師、解、往、生、論、偈、眞、実、功、徳、相、云、從、菩、薩、智、恵、清、浄、業、起、莊、嚴、仏、事、依、法、性、入、清、浄、相、是、法、不、顛、倒、不、虚、偽、名、為、眞、実、功、徳、

往生論註

眞実功德相者有二種功德一者從有漏心不順法性……皆是顛倒皆是虚偽是故名不実功德二者從菩薩智慧清浄業起莊嚴仏事依法性入清浄相是法不顛倒不虚偽名眞実功德

すと云うにはあらず」と反論している。つまり、両者の人間の相違が根底にあって、その上に凡夫における眞実心の具・不具の論議が展開されているといえよう。

第二は至誠心を自力・他力に分積することの是非の問題である。良忠が批難する「或執者」とは証空のことであろう。すなわち、良忠は、自力他力の名目は聖道門と浄土門とを相対せしめる時だけに用いるべきであって、浄土門の中でさらに重ねて自力他力を分積することは法然相伝の義に違背する、とする。しかし、『三部経大意』『三心料簡』（醍醐本）

をどのように評価すべきかという課題がある。

第三は三心具足は一心づつ段階的に具足するのか、あるいは三心同時に具足するのか、という問題である。良忠は証空の三心積を段階的具足説と受けとり、自説の同時具足説の立場から批判を加えている。良忠が批難する「今難云」、「有云」とは証空のことであろう。しかしながら、同時具足説をとる良忠には別に横具三心説のほかに堅具三心説も説かれているし、逆に良忠が段階的具足説とみなした証空にも三心即一心説があることを指摘することができる。つまり良忠はこれらのことを十分に認識した上で、あえて証空の三心積を段階的具足説として批判したのであって、その意図するところはおそらく証空の三心階梯論を否定しようとしたからではなからうか。証空の三心階梯論とは三心を単に平列的に無関係にならべて解釈するのではなくて、念仏者の信仰の深まりの三段階として三心を階梯論的にとらえたものである。つまり「至誠中嫌自力善深心中信他力行廻向中顯三行成」という三心積である。これに対して良忠はこの三心階梯論は天台宗に説く「体外権」、「開権顯実」、「体内権」という考え方を浄土教的に応用したのであって、

「不被甘心」教意各別也推尋甚荒涼也相違祖師所判」

（東宗要）

ときびしく批判している。すなわち、この問答論議では三心

全体の体系論が問われているのであって、両者のよって立つ教学的立場の相違をあらためて認識することができよう。

以上、良忠の至誠心積は法然滅後の他の門流の至誠心積に十分に注意を払いつつ、最初期の一卷本『三心私記』から再治本『伝通記』・五卷本『決疑鈔』を経て、三卷本『肝心集』にいたり、最終的に五卷本『宗要集』において集大成されたのである。至誠心に限って言えば、良忠教学は一生涯同じ積で一定していたわけではなく、常に部分的な軌道修正の積み重ねによって、現在あるような完成された積義に至ったのである。この部分的な軌道修正、つまり再治が良忠においては何故にしばしば必要であったのであろうか。その理由は、良忠自身の研鑽の深まりにもとづくことはもちろんであるが、それ以上に他の法然門流における教学形成の動向が大きく影響を与えたのではなからうか。

（大正大学講師）

新刊紹介

竹村牧男著

「大乘起信論読釈」

A5版・五三〇頁・定価八五〇〇円

山喜房仏書林・昭和六十年十月二十八日刊